

仕―脱カルト支援を手がかりに」と題する発表を行ない、上述の二名の発表者とは違って、宗教者側による実践活動に潜むカルト的側面に注意を促した。復興支援を「伝道」と位置づける宗教者たちの活動は、「救う者」と「救われる者」という非対称の関係を構築している点で、ボランティアを志す人々の「善性」につけこみ、復興協力が紛れ込んで蠢動する各種カルト団体の手法と志向性が類似している。震災と原発事故の深刻な痛手からの回復は、カルトからの被害回復と同様に、「元通りになる」ことを意味し得ない。むしろ、回復され得ない被害と心の深い痛みを引き受ける決断を共に分かち合う「脱カルト」的方向が望まれる。こういう「脱カルト」的方向を視野に入れた「カルト」再定義の学的作業が今後求められる。

研究者であると同時に宗教者でもあるこれら三名の真剣な実践活動に基づく現場報告的発表の重要性と意義を指摘した上で、本パネル代表者の新免は、阪神淡路大震災と東日本大震災の体験者として、公安によるマークなどのリスクを伴う自らの被災者支援活動をも踏まえ、3・11以降の諸宗教共同による国家総動員法的な支援活動の異様な盛り上がりに対する違和感、第三者が語り得ぬ被災者の苦しみを前にした既成の宗教言説の限界、国家による宗教統制に結びつきうる「宗教の公益性」という発想の危険性、震災体験を語らせられている側とそれを記述する側という奇妙な図式、障碍者、高齢者、生活弱者などの災害弱者に対する市民的な継続的支援の重要性、行政の管理の枠を超えて自由に動き回る政治提言ボランティアの必要性、並びに、課題共有重視型の宗教論を中心にコメントした。

難問が山積する東日本大震災後の過酷な現実に立ち向かうためには、カルトと同質の収奪システムの枠組みの中にある支配装置としての制度的宗教からの、情念に左右されない靈性に裏打ちされた共感的宗教への転換が、宗教言説においても要請される。こういう時代的要請を現代宗教論の中に加えることが震災後の重要な宗教学的課題であると言えよう。

### 伝統の危機とユダヤ教

――築きあげたものが壊れるとき――

代表者・司会 勝又悦子  
コメンテータ 小田淑子

### 翻訳聖書に見る「危機」解釈と克服

――金の子牛像事件を中心に――

大澤 耕史

本報告では、出エジプト記三十二章冒頭に描かれている金の子牛像事件について、ユダヤ教の翻訳聖書におけるその解釈を考察していく。金の子牛像事件とは、エジプトを出たイスラエルの民がシナイ山に至り、山上でモーセが神から十戒を受けている間に、ふもとでモーセの下山を待っていた民が、アロンにせまって金の子牛像を作らせ、その前で祭を行うというものがある。その結果神は激怒し、モーセがただちに下山して子牛像

を破壊し、レビ人を集めて民の内の三千人を殺害する。モーセ自身この民の行為が罪であったと言っているように(二十一節)、この一連の出来事はユダヤ教にとって非常に問題のある事件であり、彼らにとって信仰の危機と呼べるほどのものである。事実、新約聖書においてすでにキリスト教会がこの事件をもってユダヤ教を攻撃したという伝承も残されている(使徒言行録七章)。では逆に、ヘブライ語聖書が確立した後の時代のユダヤ教は、この事件をどのように解釈し、また克服してきたのか。その一端を翻訳聖書から明らかにするのが本報告の目的である。なお、翻訳聖書の底本となるヘブライ語原典は、紀元一世紀には現在とはほぼ同じ形で確立したものとみなす。

ヘブライ語聖書の最初の翻訳は、紀元前三世紀半頃までにエジプトのアレクサンドリアで生まれた、七十人訳と呼ばれるギリシア語訳である。これ以降少なくとも二世紀にはその他のギリシア語訳が流布していたと考えられるが、本報告ではギリシア語訳はこの七十人訳のみを扱う。続いて、アラム語訳であるタルグムが成立していく。現在確認されているモーセ五書のタルグムとして、オンケロス(三世紀)、偽ヨナタン(七世紀)、ネオファイティ(七―九世紀)、フラグメント(不詳)の四種類が挙げられる。その他、聖書はラテン語やシリア語など様々な言語に翻訳されていくが、それらはみなキリスト教徒によるキリスト教徒のための翻訳であるため、本報告では扱わない。具体的に見ていくと、まず七十人訳では、イスラエルの民が子牛像を作ったのは「民が悪の中にいる」(原典二十二節)からではなく、民の「衝動」のせいだと解釈するが、この「衝動」は

ラビ文献によく見られる後述の「悪の衝動」とは異なる。その他の箇所はほぼヘブライ語原典の直訳であり、特に目立った解釈は見られない。続いてタルグム、特に一番加筆の多い偽ヨナタンには、「モーセ自身が定めた時間が過ぎてもモーセが下山しなかった」(一節)、「サタンがやってきて民の心を傲慢した」(同)、「民はモーセが神の前で燃やされたのを見た」(同)、「アロンはフル(モーセの甥)が殺されるのを見て恐れた」(五節)、「民は偶像崇拜に戯れた」(六節)、「民を迷わせたのは悪の衝動」(二十二節)などの記述がある。タルグムには、民の罪は罪として認められた上で、彼らが子牛像を求めた理由やアロンの行動の背景などの細かい描写を加える傾向がある。その上で、アロンに対しては一貫して同情的であり、民全体に対しても一定の同情の余地を残していると言える。こういった自由度の高い聖書解釈は、翻訳聖書だけではなくその他のユダヤ教文献にも見られることから、翻訳聖書がユダヤ教の聖書解釈の慣習に則っていることは明らかである。その上で、解釈を直接聖書本文に織り込んだという点に、その特徴があると言えよう。

### 「第二神殿崩壊」はいかに解釈されたか

紀元後七〇年、それまでのユダヤ教の中心であった神殿がローマ帝国のティトス帝によって崩壊され、以後、ユダヤ教徒は国家を失う。宗教的な中心を失うことになったこの事件は、ユダヤ教の転換期とされる。以後、祭司集団が率いる祭儀的なユダヤ教から、ラビ(トーラーの学びの師)が主導するトーラー

勝又 悦子